

復活のイエスに遭遇した(マタイ 28:9)二人のマリアは(28:1)、何が起きているのか分からないまま、バタバタと慌てて走った。そして、ひっそり隠れていた弟子の許へ行き、天使とイエスの言葉(28:7,10)を伝えた。

マリアらの報告を聞いた弟子たちは、数日後(最短で徒歩 3 日の距離)、ガリラヤの山で復活したイエスに出会い、ひれ伏した(28:17)。しかし、復活した師イエスを疑う弟子もいた(28:17)。

弟子の一部は何を疑ったのか。復活はありえるのか、本当に十字架で死んだのか、師に似たソックリさんではないか、と不審はいくらでも膨らむ。とはいえ彼らは直弟子で、教えに心打たれ、奇跡の業に神の国を待望した者たちだ。そんな彼らにとって、何が復活を信じさせない壁になっているのか。

復活はいわゆる「教え」の範疇を超えており、心に納めるには「ひと皮剥ける」必要があるのかもしれない。逆に二人のマリアは、聖書(旧約)の教えなどよく理解できなくても、復活との遭遇を「恐れと喜び(28:8)」が交錯する混沌のまま受容した。

復活は、教えの延長線上にある頂点ではない。

福音書を締めくくる最後の言葉は「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる(28:20)」。注意を喚起させる原語まで訳出すると「そして、見よ、私はあなた方と共に～」となる。こう聴くと、降誕を告げた天使の言葉と響き合うではないか。

「見よ、おとめが身ごもって～この名は〔神は我々と共におられる〕という意味である(1:23)。

見よ、復活のイエスはいつも弟子と共にいる(28:20)。見よ、神は我々と共にいる(1:23)。

この響き合いをじっくり噛みしめ、私たちの心に丁寧に納めたい。

「主なる神はアダムを呼ばれた。〔どこにいるのか〕。彼は答えた。〔あなたの足音が聞えたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから〕(創世 3:9~10)」。誘惑者の蛇が言った通り(2:5)、アダムは善悪を知り、罪なる己を自覚して神を恐れ、隠れた。

神は、アダムのすべてを御存じでありながら「どこにいるのか」と尋ね、答えさせる。人間の主体性を見守りながら、自覚を促している。

人間(アダム)はいつも神に尋ねられている。それではその問いに、キリストの弟子たる私たちはどう答えるのか。

「私はキリストと共におります(マタイ 28:20)」、「あなた(神)と共におります(1:23)」と答えるだろう。祈りとは、神と、復活のキリストと、祈る私が共に在り、響き合っているイメージ。

復活したイエスは、「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け～(28:19)」と弟子たちに命じた。

私たちは、弟子の弟子のそのまた弟子にキリストの信仰を手渡され、弟子の一人になった。私たちはその手渡しの途上にいるのだ。

日本では明治になると、路傍で太鼓を叩いて悔い改めや救いを唱え、大売出しチラシのようにトラクト配布で人々を教会へいざなった。それでは今、私たちはどうやってイエスの命に答えていくのか。

何よりも弟子であることの出発点を自覚しておきたい。

「見よ、キリストなる神が世の終わりまで、我々と共におられる(マタイ 28:20,1:23)」ことが祈りの内に響いているのだから、日々祈っている私たちのすべてがその機会となろう。それが、人間のもくろみや計算がない伝道、気持ちのいい自然な伝道。



#### 《おまけのひとこと》

復活は降誕の完成であったか 降誕は復活の入口であったか 福音書の右端にある二つの結び目ははらり頁をめくると 言葉と奇跡が溢れ出て 落丁はない 私たちの自由な日々にもこの結び目が